

保育の技術としての音・声・音楽 ～2年間の保育音楽・療育音楽による保育者育成の可能性～

中武 亮子

Sound, Voice and Music as Skills of Nursery School Teachers :
The Possibilities for Training Nursery School Teachers through
the teaching of nursery and therapeutic music in Junior College

Ryoko NAKATAKE

はじめに

筆者は、平成15年度より、宮崎学園短期大学保育科において保育音楽関係の授業とともに、「こども音楽療育士」及び、「音楽療法士2種」取得のための授業を担当している。また、本学付属の「こども音楽教育センター」において音楽教育及び、音楽療法の実践を行っている。

保育の現場において、音や音楽は子どもの発達と密接に関係している。このことは、保育の現場では、登園時から降園時まで音や音楽に溢れていることから言える。保育の中で音や音楽を使うのは、楽器を演奏することや、歌を歌ったり手あそびを行ったりすること自体が目的ではない。対象となる子どもの心身の発達に合った遊びの中に音や声、音楽を取り入れていたり、子どものあそびの中にある音や声、音楽を保育者が見つけてやりとりをしたりすることによって、それらの音や声、音楽が子どもたちの五感を通して豊かに広がり、結果として子どもたちの感覚や心身を豊かに育てていくことが目的であると考えられる。日頃、筆者自身が音楽療法を実践する中で、心身の障がいのために、他者の考えや思いを受け取ること、自分の周りの環境を捉えること、また、自分の思いや考えを表現することが難しい子どもたちが、音や音楽の活動を通して表現の力を発揮していることを目の当たりにしている。松井紀和は音楽を治療の道具として用いる意味について10の項目を挙げて述べている(松井2000:2-9)。また、音楽療法で使う音楽とは、「人間の音楽的活動凡てを含むものであり、後に明らかな音楽活動に発展するような幼児のリズミカルな運動、発声、音を楽しむような反復行動等原始的な行動形態から、歌う、跳ぶ、はねる、楽器を楽しむような音楽活動、さらに高度な芸術音楽の創造、演奏、鑑賞、舞踏等まで凡てを含むものである。」と述べている(松井2000:12)。実際に筆者が音楽療法の実践を行う中でも、対象者とセラピストがお互いに出す音や声、音楽、表情や身体の動きを言葉の代わりにコミュニケーションの道具として使う。こどもの育ちは、障がいのあるなしにかかわらず、すべての子どもに共通のものであることから、保育においても同様に、音や音楽を用いた豊かな感性の育ちが期待できると考える。

石橋裕子は、「子どもに意欲的な表現をうながすためには、保育者自身の充実した表現の体験の積み重ねがなければならない。」(石橋2009:50)、「保育者は子どもと多くの表現を共有する。こどもから多くの表現を受け取り、子どもに向けてたくさんの表現をするからである。表現を共有しながら、子どもたちは、保育者の姿から多くのことを学ぶ。」(石橋裕子2009:50-51)と述べている。子どもにとって、毎日出会う保育者の存在は生活のすべてで

あるといっても過言ではない。それならば、豊かな表現力を持つ保育者が担当するクラスの子どもたちが豊かな表現力を持つ子どもに育つであろうことは予想できる。しかし、筆者は近年、将来保育者として子どもの前に立つ本学の学生の中に、例えばもの大きさを表現するときに声や身体を適切に使うことができない、手あそびで指の先まで気持ちのこもった表現ができない、子どもにどのような声掛けをしたらよいかわからないなどといった表現力の弱い者が少なからずいることを感じている。

そこで筆者は、多感覚による音楽療法の手法を用いた保育音楽、療育音楽の2年間の授業で、学生を、将来出会う子どもたちの表現を豊かに引き出すことのできる保育者に育てる手立てを具体的に考え、実践したいと考える。

I 研究の目的

本稿においては、本学保育科の学生が2年間に受講する保育音楽・療育音楽関係の科目の中で、保育に必要な音楽の表現技術を身につけていく過程を考察するとともに、保育者としての音楽表現技術獲得の可能性を検討する。

II 研究の方法

1. 本学保育科の2年間で開講する保育音楽・療育音楽関係の授業における学生の現状について検討するとともに、学生に保育者として身につけてほしい保育音楽の技術について具体的に項目化する。
2. 1. の項目を基に「あそびと音楽Ⅱ」を受講している保育科1年生及び「こども音楽療育演習（こども音楽療育士取得のための科目）」を受講している保育科2年生への「保育音楽の表現技術に関するアンケート（自己評価）」を行う。
3. 学生が自分自身の保育音楽の表現技術を自己評価したそれぞれの結果を平均した数値を表やレーダーチャートで可視化する。
4. 3. の結果を比較、検討し、保育科の学生が2年間で身につける保育音楽の表現技術の獲得の過程と「こども音楽療育」関係の授業で保育音楽の技術を高める可能性を探る。

III 本学の保育音楽、療育音楽関係の授業における学生の状況

1. 2年間の保育音楽・療育音楽の内容及び保育科学生の現状

- (1) 保育科1年生の授業科目と取り組み

「あそびと音楽Ⅰ」前期15コマ

授業目標：幼児の様々な音楽活動を実践し、音や音楽を五感で感じる中で、それらが幼児の心身の発達に関係することを学ぶ。また、発達に合った遊びをグループで展開する中で、音や音楽によって幼児の主体的な表現を促す手法を習得する。

授業内容：手遊び、歌唱（幼児の歌・季節の歌）、絵本の読み聞かせ、楽器演奏、幼児の遊びの実践

「あそびと音楽Ⅱ」後期15コマ

授業目標：幼児の様々な音楽活動を実践する中で、自らが音や音楽を多感覚に感じるための心身の動きを獲得する。また、発達に応じた様々な音楽活動を自らが展開し、幼児の主體的な表現を促す手法を習得する。

授業内容：手遊び、歌唱（幼児の歌・季節の歌）、絵本の読み聞かせ、楽器演奏、幼児の遊びの実践及び展開の方法

「保育内容の研究表現（音楽表現）」前期5コマ

授業目標：幼児の発達に合った様々な音楽遊びを自らが展開する中で、幼児の主體的な表現を促す音や音楽の表現技術を習得する。

授業内容：打楽器による基本的なリズムの練習及びアンサンブル、音付け、楽器の音やCDの音楽を聴きながら動いたり、絵を描いたりする活動、絵譜によるワーク、絵本の音付け

保育科1年の学生は「あそびと音楽Ⅰ・Ⅱ」の授業の中で、手遊びや季節の歌、楽器による演奏、音楽を聴きながら動くこと、絵本の読み聞かせなどを経験している。また、「保育内容の研究表現」の授業の中では、楽器の音や音楽を聴きながら動くとともに、身体の動き、子どもの遊び、さまざまな素材・場面に合った楽器の音を出すこと、楽器の音やCDの音楽を聴きながら絵を描くといった即興的な活動も多く取り入れている。

さらに、夏季休業中から後期にかけては自主実習やボランティアに参加したり、付属の幼稚園において4日間の実践指導を受けたりするなど、保育の現場を経験している。しかし、音楽を使って子どもと遊ぶ機会のある学生はまだ多くない。

(2) 保育科2年生の授業科目と取り組み

「保育指導法Ⅲ」（前期5コマ）

授業目標：幼児の発達に合った様々な音楽遊びを自らが展開する中で、幼児の主體的な表現を促す手法を習得する。

授業内容：楽器や歌唱、身体の動きによる乳幼児の音楽遊びの実践的展開。

保育科2年の学生は「保育指導法Ⅲ」の授業の中で、1年次に身に付けたことを応用した音楽活動をグループで考え、実践していくことで、現場で使える力を身につけることを目指している。さらに、2年生はここまで2週間の保育所実習、7日～10日の施設実習、4週間の幼稚園教育実習といった保育・療育の現場を体験している。しかし、実際には音楽技術や意欲に大きな個人差があり、実践力が身につけているとは言い難い状況もある。

(3) こども音楽療育士取得を目指す学生の授業と取り組み

本学保育科は2年生約210名の定員のうち、毎年約30名～40名（今年度42名）が、卒業時に「こども音楽療育士」あるいは、「音楽療法士2種」の資格を得て卒業する（平成26年度は「こども音楽療育士」のみの開講）。これらの資格は選択制であり、通常より多くの科目を履修することになるため、「保育士資格」及び、「幼稚園教諭2種免許」を2年間で取得する本学のカリキュラムの中では、多くの学生が取得することは難しい。しかし、そのような中でも音楽療育・療育関係の科目を選択する学生は意欲的で、音楽に対する興味も深く、

それまでの保育音楽関係の科目に加えて、音や声、音楽やそれらを伴う遊びや動きの豊富な体験をしている。また、これらの専門科目を受講する2年次は、保育現場での実習を通した多くの経験から、子どもの発達と結びつけた実践的な授業が展開できるのも特徴である。以下が、その科目と授業目標である。

「こども音楽療育概論」(前期15コマ)

授業目標：障がいのあるこどもの音楽療育に関する基礎・専門知識について学習する。心身の発達過程と音楽的発達との関係、音楽と遊びとの関係、音楽療育の意義と障害種別の具体的援助方法について学ぶ。

授業内容：楽器の音やCDの音楽を聴きながらの身体表現、絵譜による、身体の動きを伴ったワーク、絵本に音付けをし、演じる

「器楽活用法」(後期15コマ)

授業目標：保育や療育の現場で、遊びの中で楽器を活用するための奏法を学ぶ

指導内容：基本的なリズム練習、様々な楽器の奏法、絵譜による楽器表現、様々な素材や物への音付け、コード奏の実際、合奏

「身体表現及び即興演奏法」(後期15コマ)

授業目標：保育者が、音や音楽と、子どもの心身の発達を理解した上で音楽の遊びを展開するための技術と身体の動きについて学ぶ。また、子どもの動きや発する声、音を瞬時に捉え、即興的に返す表現法を学ぶ。

授業内容：ピアノの音による発達の身体表現、CDの音楽による身体表現、絵譜による声と身体の表現、絵本の登場人物になつての動き(演じること)及び音付け

「こども音楽療育演習」(後期15コマ)

授業目標：障害のあるこどもを対象とした音楽療育の実践方法に関する基礎と専門知識・技術技能について学習する。発達の援助のための音や音楽の使い方、障害種別、形態別(個別、集団など)の療育の具体的方法、楽器の活用法や身体活動と音楽との関連を視野に入れた実践方法について学ぶ。

授業内容：音楽療法で行われる活動の実際(楽器の奏法、音付け、声の使い方、歌唱法、即興演奏法等)、グループで音や音楽を使った子どもの遊びを創作する、

「こども音楽療育実習」(後期15コマ)

授業目標：宮崎学園短期大学こども音楽教育センター及び学外の実習先において、障害のあるこどもたちとの交流を通して障害児を理解し、更に、音や音楽を使った音楽療育の具体的実践方法を学ぶ

授業内容：本学付属の「こども音楽教育センター」で行われる音楽療法の実践に参加し、子どもの音楽活動の記録を書くことにより子どもへの対応や音や音楽の使い方を学ぶ。

以上の科目のうち前期には、「こども音楽療育概論」において理論を学び、後期に理論を基に「子ども音楽療育演習」で実践を行う。また、後期には同時に、音と動きの関係を実際に体験して自分自身の表現の幅を広げていくことを「身体表現及び即興演奏法」で、様々な楽器の奏法を学んで技術を高めていくことを「器楽活用法」で行っている。

2. 保育音楽の表現技術の自己評価アンケート及び可視化

本学保育科の学生に、卒業までに身につけて欲しい保育音楽の表現技術として、具体的には以下のようなものがあると考ええる。

- ①正しい音程や曲に合ったテンポ、リズム、はっきりとした言葉や声で歌唱ができる。
- ②子どもの様子を把握しながら楽器の弾き歌いができる。
- ③鍵盤楽器や打楽器で、子どもの遊びや曲に合った音を出すことができる。
- ④子どもの動きや活動の目的に合った音付けができる（絵本・パネルシアター・身体やものの動き等）。
- ⑤子どもの発達に合った手あそび歌で、子どもとコミュニケーションを取ることができる。
- ⑥豊かな表情のある、はっきりとした声で、絵本の読み聞かせができる。
- ⑦音や音楽に合った身体の動きができる。
- ⑧音・音楽や声による即興演奏ができる。
- ⑨子どもの発達に合った遊びが実践できる。

これらの項目をそれぞれ5段階のレベルに分けた自己評価アンケートを行った（資料1-①、資料1-②）。学生は授業の最初に自己評価をし、その結果を踏まえて自分が授業の中で意識しながら身につけていく感覚や身体の動き、それにとまなう技術が明確になると考える。また、授業の最後に再度自己診断することで、自分の成長を確認できると考える。

IV 結果及び考察

以下は、学生の音楽技術の実態を知る手掛かりとして、「保育音楽の表現技術に関するアンケート」を行った結果である（表1）。対象は、「あそびと音楽Ⅱ」を受講している保育科の1年生206名と「こども音楽療育士」取得を希望している保育科の2年生41名である。

1. 保育科1年生の自己評価から

1年生の結果の平均を見ると、「歌唱」、「手遊び」、「絵本の読み聞かせ」において「3」ポイントを越えている。これは、最も基本的で大切な技術として「あそびと音楽Ⅰ」、「あそびと音楽Ⅱ」の授業において力を入れて行っている活動であり、学生も比較的自信を持って行える活動であると認識していることが分かる。「弾き歌い」については「器楽Ⅰ（ピアノのグループレッスン）」の授業の中で入学後に始めた学生がほとんどであるため、もっと低い評価を予想していたが、2.5ポイントを越えており、同授業の成果が出ていると考えられる。筆者の授業の中でも、活動の中で使う機会を増やしていくことで、実習に向けた応用力や即興力を身につけさせていきたい。「楽器演奏」、「身体表現」については3に近いポイントではあるが、「音と動き」という、保育音楽の中でも核となる活動に直接つながるので、後期の授業の中で具体的な場面や活動を設定し、実践的な活用法を指導していき

いと考える。「即興演奏」、「発達に合った遊び」については、実際の保育現場においては一瞬一瞬の子どもとの関わりが、ほぼこのことに関係していると考えられるが、1年生にとっては意味の捉えにくい、また、技術的に難しいと考えている活動であると思われる。このことについても後期の授業で指導者が意識して、学生に、あらゆる活動の中での即興性や、発達に合った遊びを行う意味を伝えていくことで、理解が深まっていくと考える。

2. こども音楽療育演習を受講する保育科2年生の自己評価から

同じアンケートのこども音楽療育を受講する2年生の結果を見てみると、どの項目を見ても1年生よりもポイントが高くなっている。2年生になると保育現場での経験が豊富になるため、保育への理解が深まることでかえって評価が下がることも考えられたが、自己評価の結果からは、これらの保育音楽の技術が、実際の保育に必要なこととしての認識が上がるとともに、実習やボランティア等の現場で活用できたことで、自信が持てたのではないかと考えられる。

表1. 保育音楽の表現技術についての学生の自己評価

クラス \ 項目	歌唱	弾き歌い	楽器演奏	音付け	手遊び歌	絵本	身体表現	即興演奏	発達に合った遊び
保育科1年の平均	3.29	2.57	2.97	2.66	3.35	3.22	2.89	2.24	2.75
こども音楽療育演習受講生(保育科2年)	3.47	3.12	3.0	2.89	3.97	3.75	3.28	2.83	3.06

(保育科1年生206名、保育科2年生41名)

3. 自己評価の可視化

自己評価アンケートの結果は、学生全員が現状とそれ以降の成長が視覚的に分かりやすいようにレーダーチャートに記入したものと同時にファイルに綴じて、自分の強みや課題、目標を確認しながら授業に臨んでいる(資料—2)。レーダーチャートによる可視化を行ったことで、今まで学生が漠然と捉えていた、または全く意識していなかった自分の音楽技術を意識し、向上させるために具体的な取り組みがしやすくなると考える。ただし、その取り組みには指導者の定期的な働き掛けが必要である。

以下は、保育科1年生の平均と、「こども音楽療育演習」の授業を受講している保育科2年生の平均をレーダーチャートで表したものである(図①、図②)。保育科1年生では、「弾き歌い」、「即興演奏」、「子どもの発達に合った遊び」の部分がへこんでおり、指導者にとっても今後の授業で何を重点的に指導していくのかという意識付けの参考になると考える。また、保育科2年生では、全9項目において3ポイント近く、またはそれ以上の数値が見られるが、現場で保育を行っていくためには、さらに自信を持って場に合った音や声、音楽を使いこなしていくための技術や感性を身につけるための授業を指導者が工夫していくことや、卒業後も本学において研修会を開催するなどして、継続的な研鑽の場を設けていくことが肝要であると考えられる。

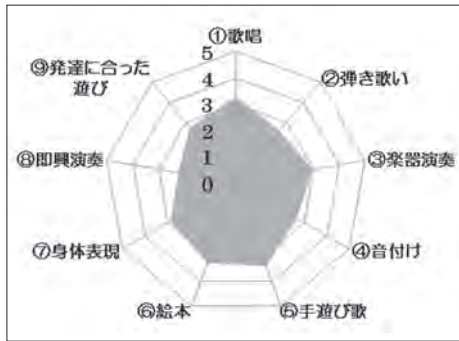


図1. 保育科1年生の自己評価平均値

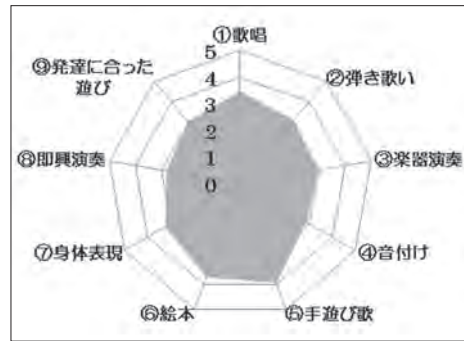


図2. こども音楽療育演習受講生(保育科2年生)の自己評価平均値

続いては、保育科1年生と「こども音楽療育演習」受講者(保育科2年生)の平均値を重ねて表したレーダーチャートである。どの活動においても保育科2年生の数値が高いことが一目でわかる。今回は保育科1年生と「子ども音楽療育演習」を受講する2年生の比較であるが、今後は1年生が2年生になった時の数値、さらに、こども音楽療育関係の科目受講後の数値を比較することにより、こども音楽療育関係の科目を受講する意義について検討することが可能になる。

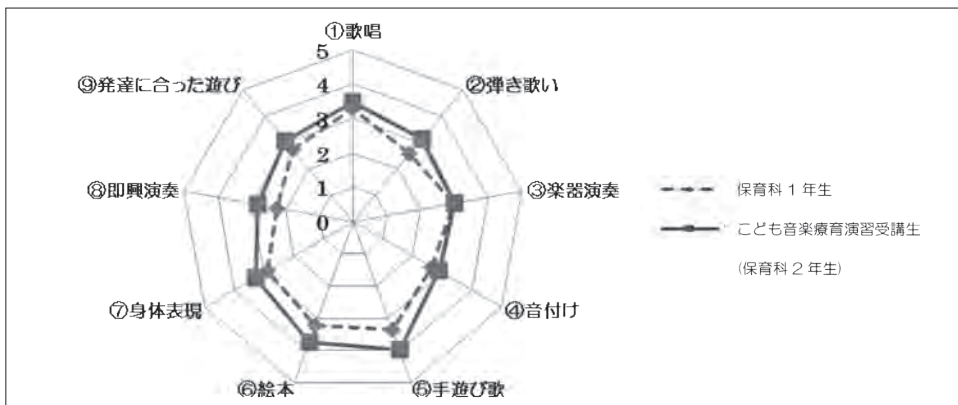


図3. 保育科1年生とこども音楽療育演習受講生(保育科2年生)の自己評価平均値の比較

V 保育音楽・療育音楽による保育士養成の可能性

1. 歌唱、手あそび、絵本の読み聞かせ

この活動は、今回のアンケートの結果で比較的良好な評価を得ているので、学生が自分の強みとして自信を持って行い、指導者としては「あそびと音楽Ⅰ・Ⅱ」の中で、さらにレパートリーを増やしたり表現の工夫をしたりできるように意識しながら指導していく。具体的には声の出し方、顔の表情や身体・手指の動き、言葉の意味の理解や表現、発達年齢に合ったものを提供できるようになることなどである。

2. 楽器演奏と身体表現

楽器演奏は、合奏のように形の決まった演奏とともに、即興的に自由に演奏したり、学生同士がお互いに音を聴きあいながら合わせていくアンサンブルができることを目指した

いと考える。具体的には様々な楽器の種類、奏法、音、それぞれが持つ音の意味を理解し、子どもの動きや活動に合った、心身に伝わる音が提供できるようにすることである。

身体表現は、聞こえてくる音を聞き取り、意味を理解し、柔軟に動くことによって行われると考える。この「音と動き」の関係は人の生活の中に常にあるものである。保育や療育を行う時にも、子どもの発達と身体の動きの理解や、見えるもの、聞こえるものと、動きとの一致が求められる。大きなものは大きく、小さなものは小さく、自分の身体を感じながら表現することは簡単ではないが、そこに音があると、時には他者と体をぶつけるような体験も可能になり、表現が広がる可能性が大きい。このような活動には多彩な音と身体表現が必要になってくるが、1年次には「あそびと音楽Ⅰ・Ⅱ」、「保育内容の研究表現」の中で、音とそれに伴う身体の動きの種類を多く知らせることができるのではないかと考える。2年次の「保育指導法Ⅲ」では、それらのバリエーションを増やしていくことを目指していく。

子ども音楽療育の科目である「器楽活用法」では、楽器奏法の技術やリズムの練習、様々な楽器によるアンサンブルを繰り返し行う。同じく「身体表現及び即興演奏法」の中では、多種、多様な音に合わせて動くこと、動いているものや人に合った音を付けていくことを繰り返し行っていく。

3. 即興演奏、音付け、子どもの発達に合った遊び

これらの活動は他のすべての活動に関係してくる。子どもの動きは予測のできないものであり、それに応じて遊びの中でも保育者は常に即興的な動きをしている。「こども音楽療育演習」の中では、楽器演奏や歌唱、身体表現などの基礎的な技術を応用して、子どもの発達に合った遊びを創造していくことを目指すが、その中で使う音や音楽、声もほとんど即興的なものである。これらの力は、1年次から多彩な音の体験をしていく中で培っていくと考える。

4. 弾き歌い

保育音楽の表現技術の一つである「弾き歌い」は、保育現場の中で最も子どもたちの身近で行われている。保育・療育の音楽活動の中では、楽譜に書かれたとおりに音符を追って弾いていくだけでは遊びが成立しないし、子どもが楽しさを感じることもできない。同じ歌でも、曲に合った、子どもの動きに合った、場面をあらわす、子どもに話しかける時のB.G.M.としてなどと、場に応じて弾き分けたり、子どもが歌ったり楽器を演奏したりしやすいように支えたりするには、多彩な音やリズム、気持ちや身体の動きも必要になる。すべての保育音楽、療育音楽の授業において1年次から少しずつ弾き歌いを行うことで、実践的な力を獲得することを目指す。また、この技術を高めるためには「器楽Ⅰ・Ⅱ」の授業に負うところが大きいので、同授業における学生の動向や技術の習得も視野に入れていきたいと考える。

5. まとめ

保育音楽、療育音楽の授業内容や学生の状況を振り返り、保育者として必要な音楽技術と具体的に照らし合わせ、授業の中で補っていく課題を見直して改めて確認できたことは、

これらの音楽技術の総合性である。子どもたちと音楽活動をする時に使う技術はどれか一つではなく、総合的なものである。それに伴い、保育者の使う感覚は多感覚でなくてはならない。榊原洋一は、アメリカのNICHD（国立子ども健康発達機構）の調査から「子どもの発達におしなべて良い影響を与える因子として明らかになったのは**保育者の感受性**であった。」という結果を紹介している（榊原：2009 2-3）。また、「“子どもに寄り添い、受け止める”行動は、このNICHDの調査における保育者の感受性の要件の半分を満たしています。つまり、子どもが出しているサインに敏感に気が付くということです。しかし残りの半分は、子どもの出しているサインに気が付き、さらにそのサインの性質を見抜き、適切な対応することなのです。」とも述べている（榊原2009 3）。山下恵子は、乳幼児期に重要な「音や音楽を使った活動で高められる力」として、人を信頼し、人へ期待し、自分から人への働きかけを行い、相互に繋がりを感じることでできる力である「つながり力」、事物や事象を自分の身体に感じ、受け止められる様々なりズムやテンポを増やし、次には、感じ、受け止めたことを外界に向かって身体で表現していく力である「からだ力」、体性感覚や五感などの色々な感覚を使って、音や音楽を感じとることのできる力である「かんかく力」、子どもたちの遊べるものが増え、遊べる人が増え、自ら遊びを作り出す力である「あそび力」という4つの視点をあげている（山下2014:27-28）。

子どもたちがこれらの力を獲得し、発揮する手助けをするのが保育者であり、子どもに寄り添い、受け止めた先にある「子どもの発達の可能性」を磨いていくために、保育者には、自分自身の感受性を高めていくことが求められる。本学の学生が自分の中にある力に気が付き、2年間で伸ばしていく手助けをすることが、保育音楽、療育音楽の可能性を信じ、授業の中で筆者が行うことであると考えます。

今後さらに、本学で23年間続けてきた「こども音楽教育センター」における地域の子どもたちとの音楽教育及び音楽療法と、その実践研究で生み出してきた手法により行ってきた保育音楽、療育音楽の授業の意義について考察し、研鑽を深めていきたいと考える。

おわりに

今回のアンケート記入に、学生が全員、真剣に記入してくれたことにまず感謝する。さらに、筆者自身が本学において、授業の中で保育士の養成を行うことの一端を担っていくことの意味について考えた。核家族化がますます進む中で、子育て中の保護者が真っ先に頼れるのが地域の保育所、幼稚園等が行う「子育て支援」のシステムであろうと考える。そこで地域の子どもたちや保護者の支援をするということを考えてときに、保育者養成を行うことは本学が地域の子育てに、間接的ではあるが大きな比重で関わっていることになる。現在、地域の保育現場の保育者は、多くが本学の卒業生である。つまり、本学における保育者養成について考えることは、地域の子どもたちについて考えることにつながる。この責任の重さを感じながら日々、保育者となる「人」を育てていきたいと考える。

最後に、今回の執筆に当たり、御助言をいただいた山下恵子先生、アンケートの実施及び取りまとめにご協力いただいた、片野郁子先生、後藤祐子先生、中武紋子先生、中武詩織先生に心よりお礼申し上げます。

参考文献

- 石橋裕子 2009 『保育内容表現』 北大路書房
- 榊原洋一 2009 『小児保健—子どもに活かす病気と発達の理解—』 建帛社
- 松井紀和 2000 『音楽療法の手引き』 牧野出版
- 山下恵子 2014 「第4章 音楽療法実践の領域 I. 障がい児のための音楽療法」
『音楽療法ハンドブック』 星雲社

平成 26 年度 保育音楽の表現技術に関するアンケート ①

保育科	年	クラス	NO.	氏名
-----	---	-----	-----	----

質問項目	好き	苦手	評価の視点	自己評価	a) 強み b) 課題
① 歌唱について			正しい音程や曲に合ったテンポ、リズム、はっきりとした言葉や声で歌唱ができる。	5 4 3 2 1	a) b)
② ピアノの弾き歌いについて			子どもの様子を把握しながら楽器の弾き歌いができる。	5 4 3 2 1	a) b)
③ 楽器の演奏について			鍵盤楽器や打楽器で、子どもの遊びや曲に合った音を出すことができる。	5 4 3 2 1	a) b)
④ 音付けについて			子どもの動きや活動の目的に合った音付けができる。	5 4 3 2 1	a) b)
⑤ 手あそび歌について			子どもの発達に合った手あそび歌で、コミュニケーションを取ることができる。	5 4 3 2 1	a) b)
⑥ 絵本の読み聞かせについて			豊かな表情のある、はっきりとした声で、絵本の読み聞かせができる。	5 4 3 2 1	a) b)
⑦ 身体表現について			音や音楽に合った身体の動きができる。	5 4 3 2 1	a) b)
⑧ 即興演奏について			即興による音・音楽や声の演奏ができる。	5 4 3 2 1	a) b)
⑨ 子どもの発達に合った遊び			子どもの発達に合った遊びが実践できる	5 4 3 2 1	a) b)
⑩ 授業目標	① ②				

平成26年度 保育音楽の表現技術に関するアンケート ②

保育科 年 クラス NO. 氏名

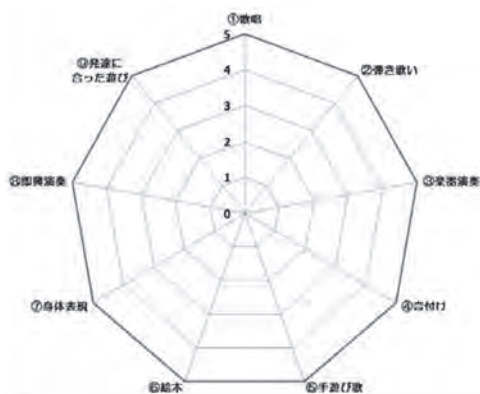
	質問項目	好き	苦手	評価の視点	自己評価	授業で学んだこと
①	歌唱について			正しい音程や曲に合ったテンポ、リズム、はっきりとした言葉や声で歌唱ができる。	5 4 3 2 1	
②	ピアノの弾き歌いについて			子どもの様子を把握しながら楽器の弾き歌いができる。	5 4 3 2 1	
③	楽器の演奏について			鍵盤楽器や打楽器で、子どもの遊びや曲に合った音を出すことができる。	5 4 3 2 1	
④	音付けについて			子どもの動きや活動の目的に合った音付けができる。	5 4 3 2 1	
⑤	手あそび歌について			子どもの発達に合った手あそび歌で、子どもとコミュニケーションを取ることができる。	5 4 3 2 1	
⑥	絵本の読み聞かせについて			豊かな表情のある、はっきりとした声で、絵本の読み聞かせができる。	5 4 3 2 1	
⑦	身体表現について			音や音楽に合った身体の動きができる。	5 4 3 2 1	
⑧	即興演奏について			即興による音・音楽や声の演奏ができる。	5 4 3 2 1	
⑨	子どもの発達に合った遊び			子どもの発達に合った遊びが実践できる	5 4 3 2 1	
⑩	授業目標の達成度			自分の立てた授業目標についての評価	5 4 3 2 1	

授業の感想

<p>.....</p> <p>.....</p> <p>.....</p>
--

～ 保育音楽の表現技術 自己評価 ～

< 1 年次 >



< 2 年次 >

